★ The Online Magazine of the U.S. Embassy and Consulates in Japan ★

米国大使館

アメリカの素顔を映すマガジン

Fall 2006

American View

アメリカン・ビュー

野球を通して見えてくる日米関係

Feature

「イチロー革命」の著者ロバート・ホワイティングが、野球を通じての日米の相互理解について語ります。

Food Safety

「食品の安全」に対する日米の考え方を比較します。

Religion & 9/11

イスラム教、ユダヤ教、キリスト教の聖職者３人に、宗教間対話について話し合っていただきました。

From the Editor

American View の刊行にあたって編集長からごあいさついたします。

From the Editor

オンラインマガジン刊行にあたって

マイケル・J・ボイル　編集長

American View 創刊号へようこそ！　本誌は、日米関係を広く考察する在日米国大使館発行の日本語オンラインマガジンです。かつて米国大使館は『トレンズ』という日本語誌を発行していました。質の高い刊行物として多くの方にご愛読いただきましたが、残念ながら、予算上の問題もあり、1994 年に休刊となりました。しかし、その後の「インターネット革命」によりオンライン出版が可能になったことから、日本語誌の発行を再開することになりました。そういう意味で、本誌は『トレンズ』の後継誌といえます。*American View* という誌名には複数の意味合いがあり、米国文化・社会の「展望（view)」を提供する、米国の「観点（point of view)」から重要であると判断した問題や出来事を取り上げ、ほかの観点からも検討する、そして、時には米国の「風景（view)」を楽しんでいただくという、この雑誌の趣旨を反映しています。

本誌では、日米関係の中でも、ほかの媒体ではあまり取り上げられない側面を紹介します。創刊号では、まず、日米両国の野球ウォッチャーで、『菊とバット』や『イチロー革命』などの著書を持つロバート・ホワイティング氏が、野球という、どちらの国でも人気のスポーツに対する両国のアプローチの相違点と共通点を探ることで、双方の文化について多くを学ぶことができるということを明らかにしていきます。次に、日米両国民にとって極めて重要でありながら、マスコミではほとんど論じられることのない、食品の安全性の問題について取り上げます。この記事では、個別の問題にとどまらず、「安全な」食品という広範な概念に対する日米の考え方の違いについて考察します。最後の記事は、9.11 同時テロ後の米国内での宗教間対話に関するものです。このほか、あまり知られていない米国に関する興味深い事実も紹介します。今後も、このような示唆に富んだ、面白い特集記事を掲載する予定です。

私たちは、日米関係について理解を深め、真剣に考えるきっかけになる情報を提供したいと考えています。日米関係は緊密さを増していますが、それぞれの国で評価が異なったり、相互にあまり理解されていない点も、まだ多数残っています。お互いのすべてを知ることは困難ですが、相互理解が進むほど、日米関係の重要性に焦点を当てることが容易になります。■

マイケル・J・ボイル

American View

--2006 年秋号 --

編集・発行
在日米国大使館広報・文化交流部
〒 107-8420　東京都港区赤坂 1-10-5

本誌掲載の記事は、必ずしも米国政府の見解や政策を反映するものではありません。本誌に対するご意見・ご感想は、*American View* ページ（http://japan.usembassy.gov/american-view.html）にあるフォームで送信してください。皆様から頂いたご意見・ご質問については担当者がすべて目を通しますが、回答や返信をお約束することはできませんので、あらかじめご了承ください。

©2006　在日米国大使館
無断転載を禁ず。

＜表紙＞ 1931 年 11 月に来日したメジャーリーグ選抜チームは、日本の各大学の野球チームと試合を行った。写真は、対早稲田戦および対慶応戦のポスター。

ロバート・ホワイティング
1942年米国ニュージャージー州生まれ。上智大学で政治学を学び、1969年に卒業。『イチロー革命』など多数の著書を日本語と英語で出版し、数々の賞を受賞

Feature

イチロー・ファクター

ロバート・ホワイティング

アメリカ人は、１世紀半以上にわたって、日本を理解する努力を続けてきた。日本に関する本や博士論文を山のように執筆し、無数の研究機関、シンクタンク、財団、大学の学部などを設立してきた。しかし、日本について知るべきことはすべて知ったと思い込んだ途端に、予期せぬ展開によって、考え方を改めざるを得なくなるのである。

野球は、そうした過程を端的に表す例ではないかと思われる。アメリカ人は明治時代初期に日本に野球を伝えた。しかし、その後100年以上にわたり日本の高校・大学野球やプロ野球を見てきた結果、アメリカの野球ウオッチャーたちは、米大リーグから絶えず生まれているような世界に通用する選手が日本から生まれるという希望を失いかけていた。もちろん、レベルが向上する兆しはあったし、優れた才気のきらめきが見えたことさえあった。沢村投手と来日したベーブ・ルースとの直接対決、王対アーロンのホームラン競争、そして野茂英雄などがその例である。しかし、日本人には体の大きさでハンディがあるうえに、日本の野球が軍隊や武道のような方式を採用し、「ガンバル精神」を強調して際限ない練習を強要したため、選手がこれからというときにすり減ってしまうので、アメリカ人に見下されていた。

そこへ登場して、アメリカ人が間違っていたことを証明したのがイチローである。イチローは、日本の野球史上、最も多才で非正統的な、ヒットを量産する打者であった。大リーグは彼に興味を示し、チャンスを与えようとしたが、ほとんどの評論家は、大リーグ初の日本人野手として彼は大成しないだろうと考えた。いわく、「体が小さすぎる」「線が細すぎる」「大リーグの速球につぶされるだろう」。ところが、イチローは、そうした予想をすべて裏切って専門家を驚かせ、ファンを喜ばせた。

2001年にオリックス・ブルーウェーブからシアトル・マリナーズに移籍したイチローは、今では誰もが知っているように、思いもよらないことを成し遂げた。彼は入団１年目にして、首位打者とアメリカン・リーグＭＶＰを獲得し、シーズン116勝の新記録を達成した大リーグで最もエキサイティングなチームの、最もエキサイティングな選手となった。イチローのバットは、極めて振りが速いため、球種、球速にかかわらず、どの位置に来るボールでも打つことができた。また、いったん打てば、快足で普通のゴロでも安打にすることができた。その上に、驚くべき強肩で、外野の隅からレーザービームのような送球で、油断している走者を刺す技を見せた。イチローは、その他の面でもアメリカ人を驚かせた。それまで、多くのアメリカ人は、日本人と言えば、丸の内のサラリーマンという先入観を持っていた。ところが、イチローは、特徴のあるフォーム、ジュリエット・オークリーのサングラスにひげと、華麗な雰囲気を漂わせていた。スポーツ専門放送局ESPNのルーク・サイファーは、「こんなにかっこいい日本人は見たことがない」と言った。

「私は、日本とアメリカの間の距離を縮めることに貢献したと思います」・・・イチロー

そして、さらに重要なことに、彼らのおかげでアメリカ人が全く新しい目で日本を見るようになった。

イチローが驚くべき存在感を見せたことにより、マリナーズの本拠地セーフコ･フィールドの観客数は急増した。また、日本から観光客が殺到し、イチロー入団１年目には、日本人観光客がシアトルに2000万ドルを落としていった。

イチローは、以後５年連続で200安打を達成し（大リーグ選手では初めて）、2004年には、野球殿堂入りしているジョージ・シスラーの記録を84年ぶりに更新するシーズン262安打を達成するとともに、打率３割７分２厘で２度目の首位打者に輝いた。こうしてイチローはマリナーズ宣伝キャンペーンの中心として誰からも認められるようになり、日本人としては初めて、アメリカにおける文化的象徴となったといえる。イチローは､スポーツイラストレーテッド誌など全国誌の表紙を飾り、テレビのＨＢＯやESPNのドキュメンタリー番組で取り上げられ、スポーツメディアで毎日報道された。そして、全米の子どもたちが、イチロー独特のスイングのまねをした。今、アメリカ人に、有名な日本人を１人挙げろと言ったならば、おそらくイチローの名前が出てくると思われる。米国では天皇や総理大臣でさえかなわないほどの知名度である。

イチローのおかげで、他の日本人スターが後に続くことができた。巨人軍で10シーズンにわたってプレーした後、2003年にニューヨーク・ヤンキースに外野手として入団したスラッガー松井秀喜は、独自の功績を上げている。彼は、安定した確実なバッティングと、サインをねだるファンにも報道陣にも気軽に応じる人柄で、口うるさいニューヨークのファンの心をもとらえ、ピープル誌の「地球上で最も愛すべき25人」に選ばれた。それはゴジラが、子供向けテレビ番組に登場する「恐竜バーニー」に変身したかのようであった。ピュリツァー賞を受賞したジャーナリスト、デービッド・ハルバースタムは、松井はイチローより価値のある買い物であったと評価し、ヤンキースの過去の偉大な「職人」外野手、ハンク・バウアーやトミー・ハインリックの流れをくむ「ブルーカラー、労働者階級のヒーロー」と呼んだ。

井口資仁は、2005年にワールドシリーズで優勝したシカゴ・ホワイトソックスの二塁手として、オジー・ギーエン監督お気に入りの選手であった。同監督は「井口は球界の誰よりも多くの貴重なアウトを取る。彼は常にチームのために進んで自分を犠牲にするが、これは大リーグではしょっちゅう見られることではない。私にとっては、彼こそチームの真のＭＶＰだ」と称賛した。

これらの日本人選手は、チーム優先のプレースタイルと高い勤労意欲（イチローの試合前の練習は、チームの誰よりもはるかに厳しい）を示して、パワーに執着するアメリカ人選手に、野球への新しい取り組み方があることを教えている。同時に彼らの活躍によって、ここ日本で、大きな大リーグ市場が新たに開拓されている。そして、さらに重要なことに、彼らのおかげでアメリカ人が全く新しい目で日本を見るようになった。朝日新聞の記事にあるように、「企業は自動車、家電など輸出をどんどんしてくるが、個人の実像が見えない」という、これまでの日本人のイメージに対して、「大リーグで活躍する彼らは『顔のある日本人』」だからである。

この点を強調するために、私は、著書「イチロー革命」で、ワシントン大学英文学部のショーン・ウォング教授の言葉を引用した。アジア系アメリカ人として、米国北西部で差別を体験しながら育ったウォング教授は、セーフコ･フィールドで４万5000人の観客がイチローコールをする光景、中でも白人の少年が「大きくなったらイチローになりたい」と書いたプラカードを掲げている姿に深く感動し、シアトルの人々は、地元にいながら地球市民になった、と宣言した。教授は、シアトル・タイムズ紙に掲載されたエッセーで「人種がひとつの都市の文化や社会をどのように変えるかをその都市全体が理解し、その変化を受け入れ、さらには奨励さえすることが可能である、と私は考え始めている」と述べた。

2006年に、松井秀喜が外野でダイビングキャッチを試みた際に手首を骨折したことについて、ヤンキースのファンとチームメートに謝罪をしたことは、アメリカ人を驚かせ、米国の主要メディアでは内省を促す論調が相次いだ。コラムニスト、トム・プレートはロサンゼルス・タイムズ紙に書いた。「スーパースター選手が甘やかされ、不相応な高給を取り、代理人に守られて、実に不愉快な態度を見せる時代にあって、日本から来た松井は、人間とし

て、またチームプレーヤーとしての品格を備えることよって、１人の選手としての偉大さを超越する存在となった･･･。『申し訳ない』という松井の言葉は、新たな自由の鐘の音のように全米に響き渡った」

これらの日本人選手が、日本の社会に与えた影響は、さらに大きい。スポーツライター賞を受賞したジャーナリスト増島みどり氏は、日本人には、長年にわたってスポーツの国際舞台でトップに立てないことから来る「コンプレックス」があることを指摘し、イチローをはじめとする選手たちが、そうしたコンプレックスを打ち破るために果たした役割について述べた。2001 年に彼女は、司馬遼太郎の「江戸時代はもとより、明治以後も世界の一員だったことはない。つまり、特別会員もしくは準会員もしくは会員見習であったとしても、ちゃんとした会員であったことはない」(『世界のなかの日本』司馬遼太郎、ドナルド・キーン［中央公論社、1992 年］）という言葉を引用した上で、次のように書いている。

「海外で活躍する日本選手たちの数字や記録、技術のすばらしさといった『アスリートとしての』活躍ぶりには留まらないのである。私がここでみなさんに伝えておきたいのは、彼らが、21 世紀という新時代において、日本社会にもたらした新たな概念や哲学であり、それが与える絶大な影響力についてである」

言い換えれば、これらの優秀な選手たちは、自信を持って振る舞い、総じて、職人としての確かなアイデンティティーを持っているのである。彼らは、外国で働くことから来るプレッシャーと期待に耐えることができ、また常に自分を他と比べて優劣を付ける必要性を感じずにいることができる。その意味で、彼らは、さまざまな国際舞台で日本人がどう振る舞うべきかを示すお手本と見なすことができる。

チャリティー野球の試合で談笑するシーファー駐日米国大使（左）と千葉ロッテ・マリーンズのバレンタイン監督

(写真 R. Alferez, U.S. Embassy, Tokyo)

こうしたイチロー・ファクターによって、アメリカ人が日本に対して持つイメージが変わったとするなら、その逆も真であるといえる。日本人も、それまでアメリカ人について独自の先入観を持っていた。そのひとつが、米国から来た野球監督は、基本的な野球哲学が違うため、日本のチームを優勝させることはできない、というものであった。多くの日本の球団では、選手が褒められることはめったになく、嫌がらせ、試合後の反省会、そして前夜の試合で成績不振だった者の朝の特訓が日常茶飯事である。これに対して、アメリカ人はのんびりし過ぎているとされていた。

ところが、2005 年に、有名なボビー・バレンタインが、日本式野球と米国式野球の最も良いところを取ろうとするハイブリッド方式で、アメリカ人監督として初の日本シリーズ優勝を果たして、皆を驚かせた。

以前に日本野球を経験したことのあるバレンタイン監督は、日本人選手を高く評価していた。彼は、日本人選手が長年にわたって米国では過小評価されてきたと考え、彼らの勤勉さを活用した。しかし同時に、シーズン後半に息切れしがちな日本のプロ選手の傾向への対策として、適度な休養を取ることを重視するとともに、日本の習慣に比べると短く、効率的な練習を取り入れた。また日本の多くの球団に見られる権威主義的な規律と否定的な考え方を避け、野球は楽しむべきだ、と説いた。こうして解き放たれた選手たちは、それまでにない活躍を見せ、日本シリーズでは阪神タイガースに４連勝して優勝した。

その年末には、バレンタイン監督の手法が、一部で熱狂的に称賛された。あるリサーチ会社が行った、理想の上司は誰かというアンケート調査では、外国人としてただ１人、バレンタイン監督が上位に入った。日本金属工業の社長が、新聞で、厳しい管理と働き過ぎの伝統を緩和し、バレンタイン方式で社員を扱うことを日本の企業に呼びかけた。珍しいことに、多くの元監督や現役の監督もバレンタイン方式

スポーツを通じた日米の接触が増えれば増えるほど、相互に学び、影響を与え合うことが多くなる。

を称賛し、厳しいトレーニングを見直すべきだと提案した。

バレンタイン監督は、ある日本の銀行の大規模な宣伝キャンペーンの主役に起用され、脚光を浴びることを楽しみ（「私はここにいる運命なのだ」と彼はよく言っていた）、ロッテは大リーグの優勝チームを相手に真のワールドシリーズを戦う準備ができていると豪語して、すでに彼を崇拝するロッテ・ファンをさらに熱狂させた。

まだ結論を出すには早すぎるかもしれないが、根本的な変化が進行しているようである。最近開催されたワールド・ベースボール・クラシック（ＷＢＣ）の第１回大会がその一例である。大きな成功を収めた（そして長らく待たれていた）この大会は、将来の状況を垣間見ることができて興味深かった。ＷＢＣは、世界各国からのチームの参加を確保するために、各国の球団、政府、リーグ幹部、そして選手たちの協力を必要とした。大会のまとめ役を務めた米大リーグは、当初開催時期を理由に参加に積極的でなかった日本を説得するために、特に骨を折った。愛国心や政治的な点数稼ぎが、このイベントの障害となることがあってはならなかった。

言うまでもなく、ＷＢＣでは日本が優勝し、日本国民の半数近くが、サンディエゴ市で行われた決勝戦をテレビで観戦した。バレンタイン監督の功績を考えると皮肉なことに、ＷＢＣの日本チームは、猛練習の代名詞ともなっている、伝統主義の王貞治監督の下で優勝を果たした。王監督率いる日本チームの順調な活躍振りから、日本の多くの野球専門家は、結局日本式野球が最も優れている、との結論を出した。「チーム・ジャパン」の主将を務めた努力家のイチローも同様の意見を述べ、マリナーズのチームメートも試合の準備にもっと時間を費やすべきだと提案した。ワールドシリーズ優勝チーム、ホワイトソックスのオジー・ギーエン監督は、チーム・ジャパンが大リーグでフルシーズンを戦った場合、20 勝できれば運が良い方だ、というごう慢な一言で日本チームを片付けた。しかし、準備不足がたたって２回戦で敗退したお粗末な「チームＵＳＡ」を率いたバック・マルティネス監督は、米国の大リーグは日本方式をまねるべきだと語った。

このような出来事はすべて、日米それぞれの社会の変化に少しずつ影響を及ぼしている。アメリカ人に日本の印象をたずねると、貿易障壁や「日本株式会社」という答えが返ってきたのはそれほど昔のことではない。しかしながら、今日の衛星テレビやインターネットの時代には、日本の映画、テレビゲーム、アニメ、漫画、ファッション、デザイン、そしてハローキティの魅力を語るアメリカ人が増えている。今年７月、米国の主要テレビネットワークのひとつ（ＰＢＳ）が、初めて、日本の高校野球のドキュメンタリー番組を放映した。日本では、21 世紀の日本人は、過去の世代に比べて、外国人と一緒に働くこと、外国人の下で働くこと、そして子どもが外国人と結婚することに、抵抗が少ないという世論調査の結果が出ている。

野球は、常に、日米関係を映し出す有用なプリズムとなってきた。これまでに見てきたように、スポーツを通じた日米の接触が増えれば増えるほど、相互に学び、影響を与え合うことが多くなる。文化の共有が進むなか、今後どのような新しい展開があるかは、誰にもわからない。■

（写真 U.S. Department of State）

佐藤卓
在日米国大使館農務部職員、農学博士。1999年、ノースカロライナ州立大学農業生命科学部園芸学科博士課程修了

Food Safety

アメリカにおける食の安全に対する考え方

佐藤卓　在日米国大使館農務部

日本の25倍の国土面積に日本の2倍ほどの人口が点在し、かつ、食の多様性と流通性が求められている現代のアメリカでは、食料と飼料の安全性を確保することは国家の最重要課題のひとつといえよう。その際に求められるのは対象となる農作物（食料、飼料）に伴うリスク評価であり、その評価に基づきリスクの管理方法が決定される。例えば、トウモロコシやナッツ類等には、栽培から消費者の手に渡る過程で、カビ（アスペルギルス）由来のアフラトキシンという毒素が発生することがある。アフラトキシンにはいくつか種類があるが、そのうちのＢ１はダイオキシンの10倍という自然物の中では最も強い発ガン性を持つ。さらに急性毒性も持ち合わせ、1974年にはインドでアフラトキシンを原因とする肝炎により106人が死亡している。アフラトキシンの生成を抑制するためには乾燥などの収穫後処理が重要といわれている。しかし、収穫から消費者の手に渡るまでの長い流通経路のすべてで、トウモロコシのようなトン単位、時には数千トン単位で流通する穀類を、菌の増殖が抑えられるような環境に維持することは、コスト的・技術的に見て簡単なことではない。一方、フォスフィンという農薬を処理することによりアフラトキシンの生成を抑制できるという研究報告がある。さらに、バチルスチューリンゲンシス（Ｂｔ）という細菌が持つタンパク質を生成するように遺伝子を組み換えたトウモロコシでは、アフラトキシンの生成が抑制されることも明らかになっている。

（写真　U.S. Department of Agriculture）

つまり、アフラトキシン毒素の生成を抑制するには、収穫後および輸送中の温度・湿度管理に加え、農薬の使用や遺伝子組み換え体の導入等の方法が考えられる。アフラトキシン毒素の強さと、現状においてこの毒素を摂取してしまう可能性を算出するとともに、それぞれの手法に関して導入に伴うコスト、人体や環境に及ぼす影響、毒素低減化の効果等を考察し、最も効率的に食料もしくは飼料に伴うリスクを軽減できる手法を取らなければならない。農薬の使用を検討するのであれば、アフラトキシンの生成を抑制するのに必要な農薬の量、農薬を使用した場合の残留性、食料もしくは飼料に残留した農薬が人体や家畜に与える急性的・慢性的影響、そして農薬の使用

食料と飼料の安全性確保のためのリスク評価と、評価に基づくリスクの管理方法の決定が行政機関の役割である。

により生じるコスト等を算出し、農薬使用の是非を評価する必要がある。食料・飼料の安全確保には生産から流通、消費にいたる各要点でのリスクを把握し、最も効率的な措置を取らなければならない。食のリスク管理は多くの人材、費用、時間を必要とすると同時に、国家の公衆衛生と国民の健康を左右するものであることから、これを行うのは国家行政機関の責務である。これに加え、一般社会では、特定の危険性だけを取り上げたり感情的な議論に終始する風潮があるが、科学的見地に基づき、このような風潮を戒めることも行政機関の責任である。

農薬がその一例である。厚生労働省の発表によれば、2005年には食中毒事故が1545件発生、２万7019人の患者が出たが、そのうち７人が死亡している。死亡原因の内訳は、個人で調理したフグによる毒（２人）、毒キノコ（３人）、トリカブトによる毒（１人）、仕出し弁当のノロウイルス（１人）となっており、農薬に関しては、死者はもちろん、中毒患者も１人も出ていない。

実際に農薬、特に近年の農薬は、正しく使用すれば極めて安全である。物質の毒性を示すのにＬＤ50という数値がしばしば用いられる。これは、実験で薬物を投与した個体のうち半数が死に至る用量を体重当たりの量として表したものである。例えば、前出のフグの毒テトロドトキシンのＬＤ50は0.01mg/kgであり、体重60 kgの人間であれば0.6mg摂取すると半数が死亡することになる。また、アフラトキシンのＬＤ50は7mg/kgであり、これも強い毒性をもつことがわかる。さらに身近なものに目を向けてみると、タバコに含まれるニコチンのＬＤ50は約50mg/kg、コーヒーに含まれるカフェインは約200mg/kgとなっている。一方、農薬の場合には、例えば除虫菊に含まれるピレトリンという殺虫成分と同様の構造をもつ農薬のLD50は800mg/kg、つまりカフェインの４倍の値であり、農薬でも特別に危険

（写真　U.S. Department of Agriculture）

なものというわけではないことが分かるのではないだろうか。一般に、農薬の開発から登録、実際の利用が可能になるまでには数年の歳月と数億円から数十億円の費用がかかるといわれている。農薬は効果や安全性などの面で生産者や消費者にメリットがあり、メリットがあれば社会に受け入れられるとメーカーは確信していればこそ、企業は、このような多大なコストと時間をかけても新しい農薬を開発し続けるのだという当たり前の事実を、われわれ消費者は認識してもよいのではないだろうか。さらに、農薬の恩恵を最も受けられるのは、日本のように夏期が高温多湿な地域であり、単純な単位面積当たりの計算によると、日本が米国の約７倍もの農薬を使っていることはあまり知られていない。また、無農薬で栽培したリンゴには、農薬で病害虫被害を防いだリンゴよりもアレルゲンが多く含まれていたという事例もある。アフラトキシンと同様にリスク評価をした上で農薬を使用することの是非を問うべきであり、農薬は危険であるといった感情的な議論は避けなければならない。リスク評価といった意味では、近年話題になっている牛海綿状脳症（ＢＳＥ）ついても同じことがいえる。

riskに相当する適当な日本語がないのと同様に、「安心」を英語に訳すのも難しい。reassuranceではしっくりこないし、ease of mindもしくはpeace of mindとでも言うのだろうか。それぞれ相当する言葉がないのは文化的背景によるのだろうが、科学的に得られたリスクよりも、消費者が感じる不安としてのリスクが大きくなることは、どこの国にも見られる。行政機関には科学的リスクに加え、不安としてのリスクを低減する努力も求められているのである。■

松田友義
千葉大学大学院自然科学研究所教授、農学博士。1981年、北海道大学大学院修了。政府の各種審議会・委員会委員を歴任

食品の安全とリスクに対する日本人の概念

松田友義　千葉大学大学院自然科学研究科教授

日本の消費者の間で食品安全に対する関心が高まったのは、1996年のO157集団食中毒事件以降、食をめぐる事件が続発したことが契機となっている。ほぼ時を同じくして産地偽装等不正表示に関する事件が連続して起こったために、食品業界への信頼性も失われていった。

消費者は、これらの一連の事件を食品の安全性、食品についての信頼性の問題としてとらえたが、リスク（危険性）としてはとらえていなかった。リスクは確率的概念である。リスクの大きさはハザード（危害要因）が発現することによる被害の大きさと、ハザードが発現する確率の積で表される。国内で牛海綿状脳症（ＢＳＥ）感染牛が発見されたケースでは、日本人が国産牛を消費して変異型クロイツフェルト・ヤコブ病（vCJD）にかかる確率は、統計的にゼロと有意差がないくらいの大きさだということが発見直後にも発表されていた。しかし、メディアでの取り扱いも小さく、消費者の目がvCJDの致死率100%ということの方に向けられてしまった結果、国産牛肉の消費量が急減したのである。１×０がゼロではなく、１になってしまったといえる。この事実からも、リスクという概念が日本の消費者にとって新しいものであるということが分かる。これまで日本には危険という概念しかなかった。危険は危ないことであり、確率的概念ではない。危険なものは食べないにこしたことはないのである。

（写真　U.S. Department of Agriculture）

日本の消費者はこれまでゼロリスクを要求してきた。安全か、危険かの二者択一は、リスクが確率的な概念であることを理解していれば無理な注文だということがすぐ分かる。消費者は「安全」な食品の提供を要求するばかりで、どの程度のリスクまで許容できるのかという判断をしてこなかった。肝心の判断を行政当局に任せておいて、事故が起きたときの責任を問うばかりだったのである。これには消費者に混乱が起きるのを避けるという名目で、情報提供を怠ってきた行政側の責任もある。ＢＳＥ感染牛発見後の牛肉消費量の急激な減少が、そのことを端的に示している。

日本の消費者の間では、国産品は安全、輸入品は危険という誤解が根強く存在する。農業関係者が、日本の農業を守らなければという立場から、偏った広報活動を行っていることが影響しているものと思われる。食品の安全性は本来科学的に判断されるべきものであり、どこで作ったか、誰が作ったかということとは直接関係しない。日本産は安全、中国産は危険ということではないのだが、この辺の理解がいまだに欠けている。国内でのＢＳＥ感染牛の発見はこの事実に気付く良い機会になるはずだったが、監督官庁である農林水産省の対応のまずさを非難するだけで終わってしまった。収穫といえば消費者の健康を守ることを第一とした食品安全基本法の制定と、内閣府の下に食品安全委員会ができたことくらいである。しかし、この食品安全委員会も、米国産牛肉の輸入解禁、再解禁の問題をめぐって消費者の信頼を失いかけている。輸入を解禁するか否かの判断は、本来リスクマネジャーとしての農林水産省・厚生労働省が下すべきであり、安全委員会が行う問題ではなかった。

牛肉の問題については、日米双方の議論は全くといって良いほどかみ合っていない。米国政府が主張するのは米国産牛肉の安全性ばかりであり、日本の消費者が要求している安心を提供していない。安全と安心に関するとらえ方の違いが、そもそもの混迷の原因であるといえる。日本では、安全と安心が別の次元の問題であるということについての理解が、ようやく関係者の間に行き渡ってきた。安全は食品

属性の問題、モノとしての食品そのものの問題であり、安心はいかにして消費者に安全であるかを伝えるかという情報の問題である。安全は科学的・客観的に評価できるが、安心はそうはいかない。安心を提供するためには、消費者に的確な情報を適宜提供する必要がある。

食に関する消費者の心配要因として真っ先に挙げられるもののひとつに残留農薬がある。生活協同組合をはじめとする消費者団体の強力な働きかけによって５月から実施されている農薬のポジティブリスト制度は、農薬に対するこのような不安を多少なりとも解消するための施策である。しかし，日本農業の現状から心配されたドリフト（農薬の飛散）についても、今のところ大きな問題にはなっていない。農林水産省もポジティブリスト導入の目的は農薬の適正な使用を促すことであり、あえて検査を強化してドリフトを発見するためではないということを何度も強調している。消費者団体の側でも、ポジティブリスト対応の一斉検査の実施をそれほど強く要求していない。導入を促していたころの消費者団体ならば、早速すべての農薬を対象にした一斉検査をやるべきであると行政側に迫っていたのではないかと思われるが、今のところその動きはない。これが、生産者が負担しなければならないコストと、消費者が期待できる便益とを比較してのことだとすると、消費者団体の変化としてとらえることができるのだが、今のところその点は不明である。

ＢＳＥ感染牛の発見も 28 例目（2006 年８月 14 日現在）ともなるとメディアでの扱いも小さくなり、誰も関心を寄せない。日本の消費者の安全性に関する姿勢については、メディアの報道のあり方も問われる。食に関してのゼロリスクはあり得ないこと、どの程度のリスクまでなら受け入れられるかを消費者自身が判断しなければならないことなどを消費者自身も学ぶ必要がある。■

(写真　U.S. Department of Agriculture)

牛肉の問題については、安全と安心に関するとらえ方の違いが、混迷の原因である。

Religion & 9/11

宗教間対話：

同時多発テロ後の世界

世界貿易センターと国防総省が攻撃された 2001 年９月 11 日の同時多発テロから５周年という節目にあたり、イスラム教、ユダヤ教、キリスト教という３つの異なる宗教の聖職者３人に、9. 11 後の宗教間対話について話し合っていただいた。

ヤフヤ・ヘンディは、ジョージタウン大学（ワシントンＤＣ）のイスラム教チャプレン（学校・病院など公共施設付きの聖職者）、フレデリック・イスラム協会（メリーランド州）のイマーム（イスラム教指導者）、および国立海軍医療センターのイスラム教チャプレンを務めている。ケネス・Ｌ・コーエンは、2001 年からアメリカン大学のキャンパス・ラビ（ユダヤ教指導者）であり、またキャンパス・ヒレル（ユダヤ人学生のクラブ）の常任理事も務めている。長老派牧師のクラーク・ローベンスタインは、ワシントンＤＣ首都圏宗教間会議の常任理事およびワシントンＤＣの宗教間評議会の事務局長を務めている。

９月 11 日の同時多発テロの悲劇が起きた後、この３人の聖職者たちはいずれも、他の宗教や宗教指導者に働きかけ、それぞれのコミュニティーを団結させようとした。

写真左から：ケネス・コーエン、クラーク・ローベンスタイン、ヤフヤ・ヘンディ（写真 Barry Fitzgerald）

今回の討論では、国務省国際情報プログラム局出版部ディレクターのジョージ・クラックが司会を務めた。

クラック　９月 11 日の同時多発テロの後で、皆さんの信徒たちからはどのような反応がありましたか。また、皆さんは聖職者として、彼らの不安にどのように対処されましたか。

ヘンディ　ジョージタウン大学では、まず、学内のすべての人が一堂に会し、宗教を超えた祈りをささげるよう呼びかけました。学生や教職員が 600 人近く集まり、私がそれまでに見た中で最大の宗派を超えた礼拝が行われました。

そして、この祈りの会には、ユダヤ教、キリスト教、イスラム教、仏教、ヒンズー教などあらゆる宗教の人々が集まり、米国のために、また世界中の平和のために、

この祈りの会には、あらゆる宗教の人々が集まり、一体となって祈りをささげました。

一体となって祈りをささげました。

コーエン　アメリカン大学では、事件発生から数時間のうちに、聖職者やキャンパスの牧師全員が、何百人もの学生、教職員と共に、ケイ・スピリチュアル・ライフ・センターの階段に集まりました。私は、集まった人たちに、アメリカン大学のメンバーが、イスラム社会に怒りを向けるようなことがあってはならないと説きました。このテロに関して、キャンパスのほかの人と同じように、イスラム社会にも責任はないからです。このとても重要なメッセージは、アメリカン大学全体に反響しました。

9.11の直後数日間は、キャンパスに出てこないイスラム教徒もいました。私は、学生のリーダーたちとともに知り合いのイスラム教徒に電話をかけ「キャンパスに戻ってきてください。怖がることはありません。怖いなら、私たちが教室まで付き添ってあげます」と申し出ました。9.11によって、私たちの一体感が高まりました。

世界には邪教が非常にたくさんありますが、それを正す方法として正教があります。どの宗教にも正教と邪教があります。宗教が、神と同じように偉大な存在になるように私たちを鼓舞するのではなく、神を私たちと同じく小さな存在にするようなものであるならば、宗教は部族と変わらないことになります。最高の状況にある宗教は、私たちの中にある最も高貴なものを引き出してくれます。

パリセーズ緊急避難所で話をするイスラム教徒とユダヤ教徒の少女。この避難所は、イスラム教徒とユダヤ教徒の若い女性約20人のグループがニュージャージー州ユニオンシティーに設立した、独身ホームレスのための40床の施設である。（写真 AP/WWP）

ローベンスタイン　1978年以来、ワシントンＤＣ首都圏宗教間会議は、イスラム教、ユダヤ教、プロテスタントおよびローマ・カトリックの各宗教社会と協力してきました。従って、あの日、私たちは事件のすべての犠牲者に弔意を示す声明を発表しました。またその声明の中で、暴力を正当化するために宗教を悪用する少数の人々の行動だけを理由に、その宗教を信仰する社会全体を糾弾してはならない、そして責任ある者を法の裁きにかけなければならないと明言しました。

9.11後の６カ月間で、36カ所の集会、学校、地域団体に107人の講演者を派遣し、同時テロ事件に関連するイベントや討論会で話をしてもらいましたが、その講演者のうち約３分の２がイスラム教徒でした。

ヘンディ　９月11日の事件の直後、私は妻に、家から出ないように言いました。しかし妻は、キリスト教徒の隣人たちから、怖かったら家に来なさい、あるいは食べ物を持っていってあげます、あなたを守ってあげますと言われた、と言っていました。メリーランド州ヘーガーズタウンでは、キリスト教社会が、地元のモスクを守る警備員を提供しました。

クラック　なぜ宗教間対話が重要とお考えになりますか。

ヘンディ　私は、この活動を異宗教間の対話と呼びたいと思います。信仰は、異なる宗教的形態を取っていますが、例えば私たちの３つの宗教は、いずれも創造主の存在を信じています。この３つの宗教は、神の表現の方法は異なりますが、いずれも、詳細は違っても、同様の道徳と倫理を信じています。

異宗教間の対話とは、異なる宗教社会が一堂に会

ケネス・コーエン
（写真 Barry Fitzgerald）

し、相互の違いを尊重することを学ぶためのもので、一体になるためのものではありません。私は、ユダヤ教徒、キリスト教徒、そしてイスラム教徒が、ひとつの信仰にまとまることを望んでいるのではありません。それは不可能であり、今後も決して実現しないでしょう。コーランは、神にその意志があったなら、神は皆をひとつの国家にしていたであろうと言っています。つまり、神は、私たちが違っていることを望んでいるのです。私たちの課題は、人道的・文明的なやり方でその違いを維持することです。

コーエン　私は、「対話」をするのは人であり、宗教ではないということを認識することが大切だと思います。そして、お互いを理解すれば、お互いの共通点も分かります。

宗教は、私たちに、自己を表現する精神的な手段を与えてくれます。他の宗教を信仰する人々が神とどのように対峙（たいじ）するか理解する機会を得たときに、自らの宗教に対する理解も深めることができます。

ローベンスタイン　宗教間評議会では、異なる宗教の人々が集まり、それぞれの宗教の教えに深い敬意を払います。

私たちは、お互いに分かち合う過程で、自らの信仰の教えを捨てるのではなく、自らの信仰の教えと神に対する理解を深めるのです。

異宗教間の取り組みの非常に重要な要素に、社会正義のために協力し、相互理解を深めることがあります。これにより、他の宗教の信者を実際に知る機会が生まれます。いったんその人を知れば、お互いの信仰の共通点と相違点を学ぼうとする意欲が高まります。

ハーバード大学の世界宗教多元主義センター所長のダイアナ・エックは、世界で最も深い分裂は、宗教間の分裂ではなく、各宗教の中にいる、開放的で寛大な信仰を持つ人たちと、排他的で狭量な信仰を持つ人たちの間の分裂である、と述べたことがあります。これは、壁を築くことによってしか自分たちの信仰を揺るぎないものと感じることができない人たちと、信仰が深く根ざしているために確固たる信仰を持っている人たちとの違いです。

コーエン　タルムード（ユダヤ教の律法集）では、ラビが「勇気があるのは誰か、勇敢なのは誰か」と聞きますが、その答えは敵を友人に変える人です。私たちには非常に大きな善意が必要です。ユダヤ教の教えにおける、好戦的、戦闘的な側面を強調する必要はありません。私たちは、対話と理解に向け努力する必要があります。

ヘンディ　私は、それぞれの宗教社会が、話すことより聞く術を身につけることが必要だと思います。私たちは自分の意見を述べて満足することが多いのですが、他の人たちの話に耳を傾け、それをその人の身になって感じる必要があります。

ローベンスタイン　自分とは違う宗教の信徒たちの中でも歓迎されていると感じられるような機会をつくる努力をすべきです。人々が宗教間の境界線を超え、自分の宗教以外の集まりにも参加するよう奨励すべきです。

コーエン　共通の敵の存在ほど人々を団結させるものはありませんが、今私たちには共通の敵がいます。その共通の敵とは、憎悪と不寛容です。そのことを心に留めておけば、私たちは、共通の目的によって団結することができます。

ヘンディ　私は、日曜日のキリスト教の礼拝に招かれ、説教をしたことがあります。ヨナとクジラの話をしたのですが、説教の終わりに、この話の出典は何だと思うかと聴衆に尋ねました。すると聖書という答えが返ってきました。私が「コーランです」と言うと、皆は、聖書と全く同じヨナの話がコーランにもあったこと、そして教会で牧師が話すのと全く同じようにイマームがヨナの話をしたことに驚きました。このように私たちは共通性を発見するのです。

コーエン　私たちのもうひとつの共通点は、人間性だと思います。信仰する宗教を問わず、怒りに満ちた人々には怒りに満ちた神がおり、愛に満ちた人々は、愛に満ちた神を奉じています。私たちには宗派を超越することが大切です。なぜなら、憎悪に満ちた人間、怒りに満ちた人間は、それぞれの宗教の教えの中に、憎悪と怒りを義と認める言葉を見つけることができるからです。しかし、友好的、開放的で、

クラーク・ローベンスタイン（写真 Barry Fitzgerald）

愛情に満ちた性格の人は、自分の宗教の教えの中にそれを義と認める言葉を見つけることができます。あなたはどちらを選ぶでしょうか。

クラック　ユダヤ教、キリスト教、そしてイスラム教は宗教的教えを共有しているとおっしゃいました。そうした教えから外れたヒンズー教や仏教のような宗教はどうでしょうか。今おっしゃったことは、その他の宗教にも当てはまるのでしょうか。

ヘンディ　もちろんです。仏教の本質は、いかに自己を最高のレベルまで高め、全体のために犠牲を払うか、というところにあります。ヒンズー教の信仰は、真の自我を育て、全体にとって最高の成果を上げることを目指します。これらは、また、ユダヤ教、キリスト教およびイスラム教の教えの一部でもあります。

ローベンスタイン　また、コーランは、あなたがたの知らない預言者がいる、と言っています。

ヘンディ　その通りです。聖なるコーランの中で、私の最も好きな節のひとつである第 49 章第 13 節には、神はすべての人類を救う、そして神は 1 組の男女から私たちを創造し、私たちを平等につくり、お互いに嫌悪し合うのではなく、お互いに理解し合うための国家や部族とした、と述べられています。

コーエン　私たちは皆同じ山を登っているのだと私は信じています。山の違う場所から出発し、頂上の眺めも違うかもしれませんが、皆がまさに同じ頂上を目指しているのだという事実を心に留めておくことが必要です。

9.11 の後、宗教的狂信について盛んに議論が行われました。私は、狂信とは、人間の尊厳と個人の価値を低下させるような宗教的発現と定義しています。正教は、人間の尊厳を高めるものです。

2001 年 9 月 13 日にニューヨーク市のユニオンスクエアで行われた祈とう式典で祈りをささげるチベット人僧侶。（写真 AP/WWP）

クラック　9 月 11 日の同時テロは、犠牲者とその家族にとって悲劇的な出来事でした。しかし、多くの宗教の教えでは、悪から善が生まれる可能性があることを強調しています。皆さんは、この事件から、何らかの善が生まれたとお考えになりますか。

ローベンスタイン　世界の多くの人々が、暴力的な状況の中で、また日常生活が脅威にさらされる状況の中で暮らしています。同時テロは極めて悲惨な出来事でしたが、身を切るようにつらく、苦痛に満ちた方法で、苦しみを理解する機会を米国民に与えてくれました。私たちの安全は打ち砕かれました。これは恐ろしいことでしたが、体勢を立て直し、自由はただで手に入るものではないこと、安全が当たり前のものだと思ってはならないということを考え直す機会を与えてくれました。

私たちは今回のトラウマ（心的外傷）に耐え、脅威に立ち向かっていますが、同時に、キリスト教、ユダヤ教、イスラム教、仏教、ヒンズー教の信者、そして無神論者といった、米国のさまざまな宗教社会に対して寛容であることを確認する必要があります。私たちは皆、同じ家族に属しているのです。

コーエン　私たちが持っている価値観、つまりけちで自分の周りに壁を築くような宗教観ではなく、宗教に対して開放的で寛大なアプローチを取ることにより、互いに協力し、神が私たちに正義のコミュニティー、国家を築くよう求めていることを理解する機会を得ることができると思っています。世界を癒やすことはすべての宗教社会共通の課題であり、9.11 によってその重要性がますます高まりました。

ヘンディ　同時テロの後、米国人は、自由や安全を当たり前と考えるべきではないこと、そして私たち

ヤフヤ・ヘンディ
（写真 Barry Fitzgerald）

は団結する必要があることを学びました。それ以前にも、ユダヤ教徒とイスラム教徒の間の対話がありましたが、それは極めて形式ばったものでした。9.11 後は、ユダヤ教徒とイスラム教徒の間で、かつてないほど多くの対話が行われています。

去年、100 人のラビとイマームが、ヨーロッパで史上２度目の会合を開きました。初めての会合はその前年に開かれ、ラビとイマームが、いかにアラブ人とイスラエル人の希望の光となり、双方にとって平和的な現実を作り出すことができるか、ということを話し合いました。このように、9.11 は非常に悲劇的で悲しい出来事でしたが、ユダヤ教徒とイスラム教徒を団結させる結果となりました。そして私は、今後さらにその傾向が強まると信じています。

クラック　9.11 の教訓は何だと思いますか

コーエン　私たち宗教を信じる者、そしてさまざまな非宗教的な思想を支持する者は皆、毎日選択を迫られています。人道的な選択をすることもでき、厳しく残酷な選択をすることもできます。私たち全員が従うべき原則は、常に人道的すぎて失敗するくらいの気持ちであるべきだということだと思います。私たちは常に、人間は神の姿に似せて創造されたことを心に留めるべきであり、また黄金律を心に留めるべきです。今、私たちに何よりも必要なことは、非常に大きな善意です。それが現時点で明確に要求されていることです。

ローベンスタイン　その通りです。私は、ダイアナ・エックの言葉を一部引用したいと思います。「われわれの知る限り、われわれが住むことのできる世界はひとつしかない。われわれは、ひとつの世界で実験し、分割し、汚し、破壊してから、別の世界で暮らす術を身に付けることはできない」従って、私たちが、信仰を持つものとして、また善意の人間として直面する課題は、私たちの持つ唯一の世界で、私たちが命を生み、命を守り、正義をつくり出すようにするための方法を探し出すことです。

ヘンディ　人々を分断する壁を取り壊そうということが言われますが、私は、壁を取り壊すのではなく、そうした壁をテーブルに変えて、私たちが皆そこに集まり、この地球上における神の恵みを享受できるようにしたいと考えています。私たちが平和な世界を実現できるかどうかは、私たちがパートナーとして肩を並べて協力できるかどうかにかかっています。宗教の名を借りたテロ、過激主義、そして暴力は、私たち全員にとっての脅威です。■

＊本稿は、*eJournal USA* 2006 年８月号に掲載の "Interfaith Dialogue in the Post-9/11 World" の仮訳です。原文は以下のウェブサイトでご覧になれます。
<http://usinfo.state.gov/journals/itps/0806/ijpe/interfaith.htm>

「われわれの知る限り、われわれが住むことのできる世界はひとつしかない」

Did You Know ?

米国本土で初めて日系アメリカ人の野球チームが結成された年は？
日系 1 世だけで構成されるサンフランシスコ・フジイ・クラブが、1903 年に結成されました。
［出典：全米日系アメリカ人歴史協会 (NJAHS)］

日本で初めて野球の国際試合が行われた年は？
1896 年に、旧制第一高等学校（東京大学の前身）チームが、横浜カントリーアンドアスレティッククラブのアメリカ人チームを 29 対 4 で破りました。［出典：MLB.com］

日本の野球殿堂入りした初のアメリカ人メジャーリーガーは？
フランク・“ レフティ ”・オドールが 2002 年に殿堂入りしました。サンフランシスコ生まれのオドールは、1919 年から 1934 年まで複数のチームでプレイし、1930 年代には選手として日本を訪れています。
［出典：財団法人野球体育博物館］

カーブを考案したブルックリン・エクセルシオールズのピッチャー、ウィリアム・“ キャンディー ”・カミングスが初めてカーブを投げた年は？
数年間にわたり秘密に研究を重ねた後、1867 年に初めて試合で使いました。 ［出典：アメリカ野球殿堂博物館］

米国農務省食品安全検査局 (FSIS) の検査プログラムに従事している職員数は？
連邦政府が検査を実施する全米約 6000 カ所の食肉・家きん・鶏卵生産施設には、7600 人以上の FSIS 職員が配置されています。［出典：米国政府統計］

何らかの宗教を信仰していると表明しているアメリカ人の比率は？
90%。［出典：米国政府統計］

実際に自分が信仰する宗教の集会に参加しているアメリカ人の比率は？
約 70%。［出典：米国政府統計］